



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第38回 日本語教育方法研究会 国際基督教大学 2012年3月10日(土)

今回の研究会は、下記の通り国際基督教大学で開かれます。昨年春の研究会が中止になりましたので、2年ぶりの春の研究会です。例年、春の研究会では総会も開かれています。今回は20周年記念事業についてもご相談する予定です。皆様、是非ご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

会長 川村よし子

TABLE 1 第38回研究会開催について

| | |
|--------|--|
| 日時 : | 2012年3月10日(土) |
| 会場 : | 国際基督教大学本館1階 |
| 開催委員 : | 田中和美・鈴木庸子(国際基督教大学) 金庭久美子(事務局, 横浜国立大学) |

TABLE 2 開催スケジュール

| 午前 | | 午後 | |
|-------|--------------|------|--------------|
| 9:00 | 発表者受付 ポスター貼付 | 1:50 | 総会 |
| 9:30 | 一般受付 | 2:20 | 口頭発表開始 |
| 10:00 | 開会の挨拶 | 3:20 | 会場移動 |
| 10:05 | 会の進め方の説明 | 3:30 | ポスターセッション開始 |
| 10:10 | 口頭発表開始 | 5:00 | 講評, 次回開催委員挨拶 |
| 11:10 | 会場移動 | | 閉会の挨拶 |
| 11:20 | ポスターセッション開始 | | 参加者全員で片付け |
| 12:50 | 昼食・休憩 | 5:45 | 懇親会 |

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場にいらしてください。非会員の方でも会場で手続きをして参加することができます。皆様、お誘い合わせの上、ご参加ください。

新規入会 : 3,000円(年会費)

当日のみ参加 : 2,000円

【プログラム】

【午前の部】

●口頭発表（5件）

1. Visual Thinking Strategies (VTS)の日本語教育への応用を考える

橋本智（徳島大学）・山本朝彦（鳴門教育大学大学院）・山木眞理子（鳴門教育大学）・古賀美千留（鳴門教育大学）

Visual Thinking Strategies (VTS)は、1980年代にアビゲイル・ハウゼンとフィリップ・ヤノウィンによって開発された新しい美術鑑賞の手法である。美術作品をファシリテータと共にグループで鑑賞し、作品から発見したことを自由に述べてディスカッションすることで、鑑賞能力、言語能力、批判的思考力、コミュニケーション能力などを高めることを目的としている。ファシリテータは鑑賞者の発言を適切に言い換え、さらに多くの発言を引き出すように努める。この方法は現在、文学鑑賞や英語教育、理科の実験観察の手法として既に応用されているが、日本語教育分野にはまだ導入されていない。本研究では、このVTSの日本語学習への応用の可能性を探るために、中級と上級の日本語学習者を対象にその実践および調査を行った。VTSの手法の詳しい紹介と、実践から見えたことを学習者・実践者へのアンケートから発表する。

2. 検索エンジンを用いた主格省略文の自動判定

中村慶太（甲南大学学部生）・北村達也（甲南大学）・川村よし子（東京国際大学）

本研究の目的は、日本語非母語話者にとって理解しやすい文章を書くための支援ツールを開発することにある。本発表では、非母語話者が理解しにくい主格省略の自動検出について報告する。主格省略の有無は、構文解析ソフトを用いて入力文の名詞と述語を抽出し、それらを組み合わせて生成した文を検索エンジンで検索し、得られた検索数をもとに判定する。さらに、この判定結果と日本語母語話者による判定の比較結果についても報告する。

3. 学習者ペアによる読解後の再話活動に見られる相互行為

小河原義朗（北海道大学留学生センター）・木谷直之（国際交流基金日本語国際センター）・熊谷智子（東京女子大学）

読解とは「読んだことから内容を再構築する過程である」と捉え、学習者に読解内容の再構築を促すために「読んだ内容を相手に伝えるという目的で読み、相手に話す」という学習者ペアによる再話活動を試みた。その結果、学習者が内容を相互に再構築する過程にはいくつかのパターンが観察され、学習者の日本語レベルや読解に対する学習観の違い、読解素材の日本語レベル、構造、内容等によって様々な相互行為が起きていた。

4. 文産出と質問紙調査から見る「通」で表記する和語動詞の習得について

曹紅荃（西安交通大学外国語学院日本語科）・仁科喜久子（東京工業大学留学生センター）

同じ漢字表記「通」を持つ動詞「通る、通す、通じる、通う」の四語は互いに類義関係にありながら、それぞれ多義動詞でもあるため、習得困難が予測される。本稿では、学習者の使用と理解を解明するために、学習者コーパスにおけるこの四語の言語運用を分析した上で、中上級日本語学習者を対象に、文産出調査(15名)と質問紙調査(42名)を行った。その結果、文産出調査における産出は学習者コーパスのものよりバラエティがあるものの、両方の産出ともいくつか限られた用法に偏っており、特に「媒介や手段」を表す「～を通して」と「～を通じて」の産出頻度が高い。また助詞「を」の有無に影響され、「通る」と「通す」の自他動詞の混同が多い。「通う」に対しては典型性の高い用法が多く産出され、受容面の正答率も高いが、他の用法を回避する現象が見られた。類義語の選択においては、学習者には「通じる」を多用する傾向が見られた。

5. 視覚的補助を用いた特殊拍指導の効果—単語と文の比較—

柳澤絵美（明治大学国際日本学部）・木下直子（明海大学総合教育センター）中村則子（東京外国語大学留学生日本語教育センター）

本研究の目的は、①視覚的補助を用いた特殊拍の指導が様々な学習スタイルを持つ学習者の発音に与える影響、および、②単語と文における指導効果の違いを検討することである。初中級の学習者13名を対象に視覚的補助を用いた特殊拍の指導を実施した。その指導前と指導後のテストの発音を日本語音声教育の専門家3名が評価し、

その評価をもとに分散分析を行った。その結果、単語レベル・文レベルともに指導前より指導後の評価が有意に高かった ($p<.001$)。また、単語レベルの伸びについては、学習スタイルによって異なる傾向が確認され、聴覚型の学習者は触覚型の学習者より有意な伸びが見られた。一方、文レベルでは、学習スタイルによる有意な差は確認されなかった。本研究の結果、視覚的補助を用いた指導がリズムの習得に影響を及ぼすことが明らかになったが、その効果が学習スタイルの違いに影響するのは、単語レベルまでであることが示唆された。

●ポスター発表（上記 5 件を含む 19 件）

6. 進歩主義教育のアプローチを取り入れた日本語教育の活性化の試み—上級日本語習得者のための日本文化史講座での実践を中心として—

松本浩史（アメリカ創価大学）

本研究は、進歩主義教育のアプローチを取り入れることにより日本語教育の活性化を試みている筆者の実践を提示した。特に、アメリカ人学生のための日本文化史講座の様々な側面を記述報告した。進歩主義教育の幾つの特徴は、現在 21 世紀の教育を刷新するためにその価値が見直されている。本稿は、進歩主義教育のカリキュラムの長所を生かすことにより、アメリカ人学生が如何に古代から近世までの日本文化の学習から得るものがあるかを示した。

7. アカデミック・ライティングの授業における学習項目を意識化させるための試み

内藤真理子（立命館大学）

アカデミック・ライティングの授業の課題として提出されたレポートの中には、学習した項目が使用されていない、または各項目が有機的に結びついていないレポートが散見される。これは脱文脈化された練習がレポート作成に直結しにくいためであると考えられる。そこで、学習項目やその繋がりを意識化させられるよう、事前に詳細な採点表を配布し、色分けした課題を提出させた。本稿では実践の紹介と、効果・今後の課題の検討を行う。

8. アカデミック・ライティングのためのパラフレーズ教材の試行と学習者評価

鎌田美千子（宇都宮大学）・仁科浩美（山形大学）

筆者らは、パラフレーズ（言い換え、書き換え）をアカデミック・ライティングに不可欠な言語スキルの一つとして位置づけ、その教育方法の構築を目指している。留学生対象の従来の日本語教材で取り上げられているパラフレーズの種類はごく一部であり、体系的に学べる教材が必要である。本研究では、開発した教材の実用化に向けて、学習者による試行を実施し、その評価結果に基づき、教材の有用性と改善すべき点について考察する。

9. 短期留学生の日本語学習への動機づけ—短期留学生への支援を考える—

佐伯香奈・武田知子・古田島聡美・近藤歩（恵泉女学園大学）

本大学では毎年4か月の短期留学生を受け入れている。短い期間でも十分に学びうる環境づくりのために、個人が留学経験をどのように認識しているのかを知る必要があると考えている。本研究では、留学生2名の日記を分析した。1名は留学中に会った人々や場を学習リソースとして活用することで日本語学習への動機づけが高まっている様子がうかがわれた。もう1名は、漫画や音楽、本等、自分の趣味に接することで学習動機が高まっていた。日記から、2名が同じ体験をしていても、受け止め方が異なっている様子がうかがわれ、個性や興味関心が日本語学習に与える影響が大きいことが示唆された。一般に留学生支援策として、オリエンテーションの充実や、日本語や日本文化、日本人に接する機会を増やすことの重要性が指摘されている。しかし、それだけではなく、個人の興味、関心に沿った学習機会を提供することも重要な支援であると考えられる。

10. 留学生のビジネス日本語定型文に韻律指導を取り入れた一試み

斉藤紀子（横浜国立大学大学院生）

本研究は日本で就職を志す留学生の「ビジネス日本語」授業の一部の時間にビジネスでよく使われる定型文や会話に韻律の指導を取り入れることで、学習者が発話の際、韻律に対する意識を持つことを促し、ひいてはビジネス日本語におけるコミュニケーション能力の向上を計ることを試みたものである。佐藤（1995）によると韻律は単音よりも日本語音声に与える影響力が強いとしている。この韻律の指導のため、毎回の授業で10分程度ターゲットとして取り上げた文や短い会話のモデル音声の高低や長さを、手を使って表現してみる、文の上に書

いてみるなどの練習を取り入れ、また学生同士でお互いの発話を評価し合い、グループで話し合う等の活動を行った。その結果、学習者からは韻律に対する意識化が起こっていると推察される質問やコメントが出るようになった。

11. 学習者はどのように発表の内容を改善していたか—志望動機を語る練習の繰り返しから見えてきたもの—
島山理恵（文化学園大学留学生別科）

志望校の面接で志望動機を語るという設定で短い独話練習を6回行った。学習者は「原稿を準備する⇒話してみる⇒振り返る⇒改善すべき点があれば修正する」サイクルを繰り返し経て課題にあたり内容や話し方を改善していった。内容がどのように変化していったかを見たところ、主にトピックの選択、それらのトピックによる構成、強調すべきトピックの選択、そのトピックの内容と具体性が焦点となって改善されていたことがわかった。改善にあたっては、上記のサイクルを繰り返す中で形成された、各自の基準が参照されていたと思われる。

12. 日本語母語話者を対象とした意見文の指示表現に関する研究—「この類」と「このような類」を中心に—
坂口清香（筑波大学大学院生）

本研究では合計120名の日本語母語話者を対象に、意見文テキストを使用した2種類のタスク、すなわち、共起する様々な照応表現と併せて指示表現を考察する。穴埋めタスクと、コ系とソ系の違いだけでなく類の違いも含めた「 ϕ 、この、その、このような、そのような」の5肢選択の文法判定タスクを実施した。その結果、「このような類」のコ系優先使用の要因として、指示対象が不明確で指示範囲が広い場合に「そのような」の使用に対する許容度が低くなることが示唆された。ソ系使用の許容度が高い場合と低い場合とでは、共起する表現にも違いが見られる可能性が明らかになった。また穴埋めタスクの結果からは、代行指示や指定指示という指示表現の用法の違いや、「この類」か「このような類」かという類の違いによって、指示表現使用率が異なることも示唆された。

13. 初級学習者の言語管理上の問題をコース設計に反映する取り組み

竹内明弘（国際大学大学院国際関係学科日本語プログラム）

学内は英語公用語、学外は全くの日本語の世界、という環境の大学で、選択科目の初級日本語を履修する学生の動機は多様で、把握も難しく、シラバスの項目の選定の中核となる指針が必要となる。この指針策定の一環として、初級学習者が日本語使用場面で遭遇する問題の実態調査を行い、言語管理理論を援用してその結果を分析、選定した項目をシラバスに組み込んでコースを設計した。本発表はそのコースの授業実践と反省を報告する。

14. 初級前半のクラスにおける会話活動「トピックJ1」—日常生活に関する話題を発展させるために—

上原真知子・田崎敦子・中川和枝・小熊貞子（東京農工大学国際センター）

「トピックJ1」は、初級前半の学習者が既習の文法を用いて学習者同士で会話を構築し発展させることを目的とした会話活動である。この活動で学習者は、教師が提示した日常生活に関するトピックについてペアで会話を行った。これをトピックを変えて繰り返し行うことにより、学習者は一つ的话题を広げ発展させるために必要な話し手および聞き手としての役割を身に付けた。本発表では、この活動内容と具体的な成果を報告する。

15. 聴解能力の向上を目指した授業活動

平山允子（日本学生支援機構東京日本語教育センター）

聴解能力の向上を目指し、「学習リソースの利用」「トップダウンの聞き方」「ボトムアップの聞き方」「世界知識の拡大」を盛り込んだ授業活動を1学期間に渡り実践した。学期前にクラス内に見られた聴解能力のばらつき等の問題が、学期末試験では解消された。この結果が筆者の授業実践の単独効果によるものとは結論できないが、学期前の問題把握と学期中の継続的实践を経て目指した結果が得られたことには意義があったと考える。

16. 類義語分析ストラテジーのトレーニングに見られた正用例文分析行動の特徴

坂口和寛（信州大学人文学部）・河野俊之（横浜国立大学教育人間科学部）

現在、類義語分析ストラテジーの独習型トレーニング教材を作成し、改良を重ねている。そのうち例文作成後の例文分析行動を支えるストラテジーについてトレーニング内容を充実化するため、日本語教師養成コースで教

材を使用し、日本語母語話者の例文分析行動を調べた。正用例文の例文分析に焦点を当て、例文から想起される映像を言語化することで例文内容を把握する「映像化ストラテジー」を取り上げた。ストラテジーを用いた例文分析には、例文内容を表面的にしか説明しなかったり、例文に含まれていない周辺の事柄を説明したりする問題が見られた。こうした例文分析では、例文内容が不明瞭なままであったり、類義語の特徴発見につながりにくい情報しか得られなかったりする。そこで、映像化ストラテジーによる正用例文分析では、類義語の特徴が反映されている部分を言語化した映像から探し出し、さらに詳しく具体的に説明し直す作業が重要である。

17. 言語学習ストラテジーを重視した会話クラスのポートフォリオの効果 —中級会話クラスの実践を通して— 中村明夫（別府大学）

学習者の自律学習を促すために、言語学習ストラテジーを重視した中級会話クラスを 2011 年度前期に実践した。学習者が言語学習ストラテジーを意識しながら学習が進められるよう、学習者ポートフォリオ（以下ポートフォリオ）、ピア評価、自己評価を会話クラスに取り入れた。コース終了後に行ったアンケート結果から、言語学習ストラテジーを重視した授業が会話クラスの学習に効果があることがわかった。そして 2011 年度後期会話クラスでは、教師がポートフォリオに肯定的フィードバックを与えることで学習者がポートフォリオに積極的に関わっていくようになることがわかった。学習プロセスを可視化してポートフォリオには、ピア評価や自己評価をすることで自己モニター力が向上していくといった、言語学習ストラテジーを意識化するという役割もある。本稿では、ポートフォリオの学習効果と、その評価(assessment)の重要性が示唆されたことについて述べる。

18. 動詞と共起する語のカテゴリー化を促す指導—模擬授業における実践報告—

三好裕子（早稲田大学大学院日本語教育研究科大学院生）

「動詞と共起する語のカテゴリー化を促す指導」は、動詞の適切な使用を目的に考案された動詞の指導方法である。動詞と共起する語の共通点を考えさせることでそのカテゴリー化を促し、動詞の意味と共起関係の理解を図る指導方法で、実験において有効性が証明されている。本発表は、この指導方法を、実際のクラス（漢字圏学習者のクラスと非漢字圏学習者のクラス）において用いて行った授業の報告である。授業では、指導対象とする動詞とどのような語が共起するかを学習者に考えさせ、後で理解確認のための練習問題もさせた。学習者は、活発に意見を出し、共起する語について積極的に仮説検証を行った。指導内容の理解は良好で、アンケートやインタビューにおける指導に対する評価も好意的であった。また、漢字圏学習者と非漢字圏学習者では反応が異なり、それぞれに合わせた対応を考えるべきであることなど、実際の指導にあたっての示唆を得ることもできた。

19. 学部教養科目としての初心者向け“超短期日本語教育実習”

菊地康人・増田真理子・前原かおる・河内彩香・竹山直子・向井留実子（東京大学日本語教育センター）

発表者は、全学の学部1・2年生を対象に「超短期日本語教育実習」科目を提供している。特徴は、①約10回の授業を経ただけでの教授体験、②準備にあたり、特定の教科書によらず、教師の助言だけを頼りに、自力で、教授項目分析から、例文・タスク作成、授業体験まで行う等である。本発表では、実践の詳細と、その過程での受講生の意識の変容や成長を報告し、日本語教育を「人を育てるツール」として活用する意義を考える。

【午後の部】

●口頭発表（5件）

20. 単語力強化を目指した経済・経営用語の自己学習用 e-learning 教材の開発

仁科浩美・楊帆・石谷幹夫（山形大学）

経済学・経営学関連の授業を履修する理工学系の大学院留学生のために、単語の理解と運用を目指した自己学習用の e-learning 教材を開発した。教材作成にあたっては、専門教員から資料提供を受け、それらをテキスト分析ソフト khcoder により品詞別頻度順に分析した。コンテンツは、頻度順に抽出した名詞 500 語、する動詞 500 語、カタカナ語 300 語の3つの内容からなる。名詞と、する動詞の練習においては、読み方の練習と、実際の経営・経済学分野で使用される状況に近い文章における用法練習が可能である。また、カタカナ語では、原語を推測して、スペルを入力する練習方法を採用入れた。試行の結果、文字サイズや1フォルダーの問題数に改良の余地はあるものの、内容に関しては概ね好評であった。

21. 中国語を母語とする学部留学生の日本語クラスにおける音声指導の実践—abc という三つの新しいアクセントタイプを用いて—

吉田千寿子（中部学院大学）

中上級者向けの総合テキストを用いた授業において、語のアクセントの下がり目が意識できるようになることを目標に、語頭（または句頭）の高さの違いに注目した abc の三つのアクセントタイプによる判別やドラムビートを用いた発音練習を行った。3モーラ語の簡単な聞き取りテストを行ったところ、指導の実践前後で有意差をもって向上がみとめられた。

22. タブレット端末を活用した日本語教育の試み

山口実千代（北陸先端科学技術大学院大学）

最近注目を浴びているタブレット端末を日本語教育に活かす具体的な方法について考察し、実践した。特に入門、初級レベルの授業を行う際には学習項目や課毎に多くのフラッシュカード(絵、文字を含む)を準備する必要があり、毎回その整理も欠かせない。しかし、タブレット端末 (iPad) を使用することによってその負担が軽減されるのみならず、実に画期的に効率よく授業が行え、しかも学習者からも効果的であるとの評価を得た。本稿は、その活動の概要を、文字・表記、語彙、会話練習に分けて紹介し、それぞれの指導の実際と教師、学習者の両者から見たその効用について述べる。実践の結果、文字・表記、語彙、文型等の言語的要素の学習に有効であることはもちろん、iPad の機能を活用したちょっとした操作によって、たとえ入門期の学習者であっても、現実のコミュニケーションにより近づいた形での練習が可能であることもわかった。アンケートによる学習者の評価と今後の課題についても併せて報告したい。

23. 日本語の漢字語彙テストから見た中国人中級学習者の漢字語彙処理の問題

魏娜（筑波大学大学院人文社会科学研究科大学院生）

本稿では、中国語母語話者の漢字語彙の読み処理能力と聞き取り能力との比較を目的として、中国国内にいる中級日本語学習者 76 名を対象に漢字語彙の読みテストと漢字語彙の音声を聞いて、ひらがなで書き取るディクテーションテストを実施した。その結果、漢字語彙の読み処理能力は聞き取り能力と直接の関係を持たず、この二つのテストに異なる誤答の傾向が見られた。

24. 介護現場の山形地域語教材『聞いてわかる 介護の山形ことば』の開発

後藤典子・山上龍子・澤恩嬉（東北文教大学短期大学部）

山形など地方の介護施設では地域語が多用されている。日本語を母語としない介護士や介護士を目指す学習者（以下非母語話者）にとって、地域語の理解のないまま利用者や日本人介護士の発話を理解することは困難である。非母語話者が介護現場の会話を「聞いてわかる」ようになるための教材開発を試みた。山形の介護現場の地域語に見られた特徴を生かした教材について、開発の方法とその過程で生じた問題点、教材の特徴について等報告する。

●ポスター発表（上記 5 件を含む 18 件）

25. テレビ会議システムを利用した上級口頭表現クラス

俵山雄司（群馬大学）

テレビ会議システムを利用し、複数キャンパス間を結んで実施した上級口頭表現クラスについて報告する。コースの中ほどで受講学生に対して行ったアンケート調査の結果を分析したところ、以下のことが明らかになった。1) はじめての遠隔講義の際は、不安を感じている受講者と面白さを感じている受講者とがいた。2) 多くの受講者が、遠隔講義の利点として利便性を、欠点として音声の遅れや画面の向こうの雰囲気掴みにくさを挙げた。3) 数名の受講者が、相手キャンパスの受講者のために、声の高さやホワイトボードの文字の大きさを調整していた。

26. 基本情報交換以降の話題展開—出会いから始まる会話教材に向けて—

今田恵美（大阪大学大学院生）・高井美穂（摂南大学）・吉兼奈津子（大阪大学）・藤浦五月（大阪産業大学）

母語話者との関係構築上重要となる初対面の会話において、話すべき話題とその展開方法に困難を抱える留学生は多い。しかし、従来の中上級日本語会話教材の多くは、名前、所属、出身地等、基本的な情報の交換のみにとどまっている。そこで本研究では、出会いの初期の関係構築に焦点を当てた会話教材の作成を目指し、実際の接触場面の初対面会話データから、より多くのターンからなる話題を抽出し、会話分析の手法を用いてその展開方法を分析した。その結果、それらの話題の多くは、初対面会話に典型的な基本情報に関する質問への応答に、「実は」という談話標識を用いて新たな情報が付加されており、それにもなつてより多くの発話交換がなされていることがわかった。本発表では、「実は」に続けて付加された新たな情報が話題のタネとなり、会話参与者双方が協働で話題を豊饒化させることに成功していた事例の分析・記述をもとに、教材開発への可能性を検討した。

27. 日本語教師自身の適性に関する一考察

菊澤 寛子（国際日本語普及協会）

日本語教師である筆者は個人授業とクラス授業の運営には違いがあると実感してきたことから、教師のピリフにより違いが生じるのではないかと考え、日本語教師を対象に個人授業とクラス授業それぞれの長所と短所を聞くインタビュー調査を行なった。その結果、フレキシブルな対応ができることが個人授業の長所として、学習者主導型になりがちであることなどが短所として、またクラス授業の長所としてはグループダイナミクスを、短所としてはマイナスのグループダイナミクスや教師主導型になりがちであることなどが挙げられた。筆者が感じていた違和感が形態には直接関連がないことがわかり、調査2として日本語教師の適性とは何かを尋ねるインタビューを行うことにした。適性としてさまざまな項目が挙げられた中で、目指すべき唯一の日本語教師像があるのか（差異仮説）という協力者の話に注目し、教師の成長を考えている姿勢に筆者が考える「良い日本語教師像」があると考えられるようになった。

28. 大学生短期研修における学習者の文化認識

野畑理佳・市岡香代（国際交流基金関西国際センター）

本研究では、6週間の大学生研修において学習者がどのように文化を認識したかを捉えるためインタビュー調査を行った。調査の結果、文化認識には日本文化のイメージの形成や修正だけでなく、自文化への再解釈や自己への気づきが含まれることがわかった。自己への気づきは体験を重要な異文化経験として意識化する機会となる。文化を捉えるための観点の提示や多様な文化背景を持つ他者との気づきの共有は、研修活動において重要である。

29. 『にほんごこれだけ!』を用いた日本人学生とのおしゃべり活動の導入

宮永愛子・大熊美佳・松田真希子（金沢大学）

本発表では金沢大学の初級日本語クラスで毎週30分日本人大学生とのおしゃべり活動を取り入れた効果について報告する。受講学生は主として英語で研究する大学院生で、日本語使用の機会が乏しい。また『みんなの日本語』で積み上げ式に知識を得ても運用力が伸びないまま初級後半で学習を終える傾向が見られる。そこで地域の交流型日本語活動教材を用いて日本人学生との交流を定期的に取り入れることで、運用力を養成することとした。本発表では学習者のアンケート結果から試みの学習効果について報告する。

30. タイの日本語学習者が考える「いい授業」

中川良雄（京都外国語大学）・スィラダー ブンサーム（京都外国語大学大学院生）

教師ならだれしも「いい授業」をしたいと思っている。では「いい授業」とはいかなるものか。本発表では、タイの日本語学習者を対象に「いい授業」に関するアンケート調査を実施し、その結果を漢字圏の中国の学習者データと比較する。「いい授業」に関する考えは、タイと中国の学習者では認識を異にすることはもちろん、そこにはこれまでに受けてきた価値観や教育観、すなわち「いい授業」に対するピリフが関与することが明らかになる。

31. 「チュウ太の多言語版 Web 辞書」の利用状況調査報告

三輪譲二（岩手大学）・川村よし子（東京国際大学）

本発表では、「チュウ太の多言語版 Web 辞書」のアクセスログを基に、利用者の国や言語、利用語彙などの実態調査結果を報告する。調査により、70の国や地域から、29の言語版が活用され、多言語版の重要性が確認できた。また、辞書のカバー率も高く、インドネシア語の利用者は全体の25%を占め、タガログ語版利用者と共に、介護の語彙を多く含む文を入力していることが判明した。一方、看護関連語彙を追加する必要性も明らかになった。

32. 「3分節法」の使用はスピーチをわかりやすくするか—初級後半日本語学習者の場合—

菅原和夫・虫明美喜（東北大学高等教育開発推進センター）

スピーチ活動で重要なことは、言いたいことをわかりやすく話す、内容の一貫性であると考え、「3分節法」を用いることで、初級学習者でもスピーチをわかりやすくすることが可能であることを明らかにする。「3分節法」の使用によって、特に習得状況の良くない学習者のスピーチがわかりやすくなった。これは、「3分節法」が、学習者のスピーチを視覚化し、整理し、ポイントを明確にするためだと考えられる。

33. 口頭表現クラスにおけるディスカッションの取り組み—合意形成を目指したグループ・ディスカッションの提案—

村上智子（立命館大学）

本稿は、留学生対象の日本語クラスにおける合意形成を目指したディスカッションの取り組みを報告するものである。社会に出ていく学生には、他者との合意を形成するための能力が必要であり、それらを養う練習が重要である。そこで、ディスカッションの授業において、就職試験で多く採用されているグループ・ディスカッションの形式を取り入れ、グループで一つの結論を出す練習を行った。参加者それぞれの意見を一つにまとめるには、「整理する」「統合する」技術が必要である。そのような練習を行った結果、当初は意見をまとめることができなかった学生たちが制限時間内に一つの結論を出すに至った。グループ・ディスカッションは、個人の意見を主張するにとどまらず、他者との合意形成を図るために必要な論理的思考力が養えるよい活動であると考えられる。よって、このような練習を取り入れることを提案したい。

34. 学習者が漢字指導に望むもの—非漢字圏学習者の場合—

中西ゆか（京都外国語大学大学院生）

本研究では、漢字が苦手とされる非漢字圏の学習者の望む漢字学習について考察する。非漢字圏の学習者は、漢字をどのように学習したいと思っているのか、またその方法は授業内で実践することができるものなのであるか。本研究では、アンケートとインタビューを用いて調査を行った。調査対象者は日本国内で日本語を学ぶ26カ国98名の非漢字圏の大学生及び研究生である。その回答から学習者は漢字学習において、例文や使用場面など、多くの情報を求めていることが分かった。また、漢字習得に効果的とされる授業内でのゲームや活動を支持するかどうかは、学習者の漢字学習目的により回答が異なった。更に、調査結果から非漢字圏の学習者は、漢字を文字としての学習だけでなく、語彙学習の機会としても捉えていることが伺えた。今後は学習者の漢字習得目標やレベルによる違い、学習環境など様々な要因による調査も行いたい。

35. 日本人学生に対する上級日本語学習者のインタビュー資料の分析—聞き手としての言語行動に注目して—

広田妙子・本郷智子・山崎真弓（東京農工大学国際センター）

会話が相互行為として成立し、円滑なコミュニケーションを進めるには、話し手に対する聞き手の働きかけが重要な役割を果たすとされる。本研究では、上級日本語学習者が、相互行為である会話の聞き手として、その日本語のレベルに相応した言語行動・非言語行動をとっているか否かを探ることを目的とし、日本人学生に対するインタビュー資料を基に記述および分析を行った。その結果、情報を受け取ったことを示す言語行動・非言語行動が不適切であるために、相手に不安を与えたり、話題を維持・展開することができず沈黙が繰り返されたりする事例が特徴的に見られた。上級学習者に対しても明示的に聞き手の役割の重要性を意識した会話教育が必要であることが示唆された。

36. 音声認識技術を活用したプロソディグラフ自動出力システムの開発

松崎 寛 (筑波大学)

従来の発音 CALL 教材には、波形やピッチ曲線をそのまま示すものが多いが、そこから学習者が情報を適切に読み取ることは難しい。そこで近年の音声合成・音声認識技術を活用して、入力音声のタイミングやリズムを視覚的に補正し、自動的に「プロソディグラフ」を出力するシステムを開発した。これにより学習者は、モデル音と自分の発音、自分の過去の発音と現在の発音とを視覚的・聴覚的に比較でき、韻律をわかりやすく学習できる。これを留学生 14 名に試用させ、内省を語らせた。結果、視覚的 FB や音声合成については、概ね肯定的評価が得られた。発音が良くなった瞬間を、聴覚的・視覚的 FB を元に確信できない学習者に対しては、最初の発話（モデル音を聞く前の普段の発音）と最後の発話を比べると、向上が実感できるようである。自学自習時に「気づき」を促す適切な FB を出す方法や、発音の向上を学習者が自覚できるようにする学習管理方法の開発を今後の課題としたい。

37. 日本語中級読解授業における説明活動を用いた理解の構造化の試み

佐藤礼子 (東京工業大学)

文章理解のモニタリングを促す活動として、理解した内容を「他者に説明する」活動がある。本研究では、日本語中級学習者を対象として、小グループ/ペアでポスターの作成と発表を行い、その効果を検討した（実践 1）。活動ではポスター作成過程およびクラスでの発表の 2 段階で他者に読んだ内容を説明する必要がある。活動前後に行った理解度の自己評価および正誤判断問題によって活動の影響を検討した結果、文章理解への活動の効果は学習者によって異なることが示唆された。さらに、異なる学習者群を対象に、実践 1 と同様の活動の後、よい発表について話し合いを行い、その後再度ポスターを作る活動を行った（実践 2）。その結果、実践 2 では理解度の向上が示唆された。実践 1・2 とともに、学習者の理解度の自己評価は正確ではなかったことから、理解の過程に産出活動を組み込むことが、どのように理解したかを振り返ることにつながると考えられる。

【会費納入のお願い】

JLEM では 1 月から 12 月までを会計年度としております。2012 年度会費（3,000 円）未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2 年分未納の場合は会員資格を失います。会員資格失効後に再度入会される場合には、未納分の会費も納入していただくこととなりますのでご注意ください。会費は、郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みいただくか、研究会会場受付にてお支払いください。ご不明な点がおありでしたら、jlem-ml#tiu.ac.jp (#は@です)まで e-mail にてお問い合わせください。

【振込先】 (1) 郵便局から払い込む場合

記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会

(2) 銀行から振り込む場合

銀行名：ゆうちょ銀行

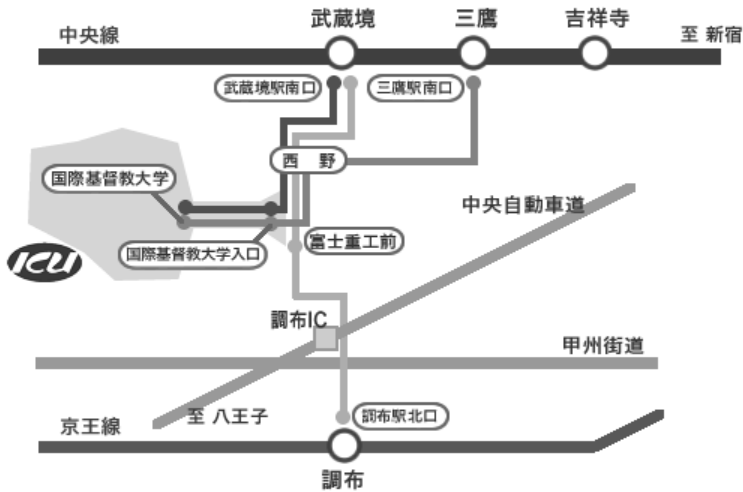
店名：〇一八 店（ゼロイチハチ店） 金融機関コード：9900 店番：018

預金種目：普通（または貯蓄） ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能

口座番号：6907651

口座名：日本語教育方法研究会

周辺のバス路線



キャンパスマップ

キャンパス紹介

中島飛行機の跡地に作られたキャンパスは約 62 万平方メートル，武蔵野の雑木林に囲まれた校舎や研究施設のほかに，学生寮や教職員住宅が点在しています。西側には東京都立野川公園も隣接し，四季の移り変わりを味わえる，恵まれた自然環境です。正面玄関からバス終点までの道は桜並木として有名です。

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 大学本館 | 12 ディッフェンドルファー記念館 東棟 |
| 2 図書館 | 13 ディッフェンドルファー記念館 西棟 |
| 3 オスマー図書館 | 14 大学礼拝堂 |
| 4 理学館 | 16 大学食堂 |
| 5 教育研究棟 | 17 東ヶ崎潔記念ダイアログハウス |
| 6 第2教育研究棟 | 19 本部棟 |
| 7 総合学習センター | 20 アラムナイハウス |
| 8 博物館 湯浅八郎記念館 | 21-30 学生寮 |
| 9,10 体育館・スポーツ・クラブハウス | 31 教職員住宅 |
| | 32 泰山荘 |
| | 35 国際基督教大学高等学校 |

